

## <鉄穴内(かんなうち)遺跡>

### 1 確認された主な遺構・遺物

- ・鍛冶工房群 奈良時代後半～平安時代はじめ頃(8世紀後半～9世紀代)の鍛冶炉を伴う工房跡4軒のほか、関連する加工段7基を検出。
- ・炭窯跡2基 奈良～平安時代と推定され、鍛冶工房と関連する可能性あり。
- ・多量の鍛冶関連遺物 鉄鉗、鑿、鞆の羽口、砥石などの鍛冶工具や鎌、鉄製紡錘車、さらに鍛冶作業時に生じる鍛冶滓・鍛造剥片などが出土。
- ・鉄製帯金具 工房床面から鉄製の巡方が1点出土(県内初)。
- ・灯明皿形土器 黒色有機物が付着した須恵器や土師器の小皿6点

### 2 主な成果

- ・奈良後半～平安時代はじめ頃の鍛冶工房の実態を具体的に示す遺構や遺物が確認できた。
- ・出土鉄器は100点近く出土しており、工具の内容もほぼ揃っている。特に鍛冶遺跡出土の鉄鉗は県内では同市木次町の寺田1遺跡に次ぎ2例目で、完全な形が分かるものは県内では稀である。
- ・古代の帯金具(鉄製巡方)は銅製・石製のものが通常多いが、本遺跡では鉄製のものが出土しており注目される。

## <堂々ノ内(どうどうのうち)II遺跡>

### 1 確認された主な遺構・遺物

- ・中世と推定される平面形が「鉄アレイ形」の製鉄炉跡1基(全長約8m、炉床幅1.5m)。
- ・製鉄炉に伴う排滓場から、鉄滓と供に多量の炉壁片出土(推定総重量約20t)。
- ・縄文時代前期の土器や石器(コンテナ1箱)

### 2 主な成果

- ・製鉄炉は炉床を2回修復した痕跡が認められるなど、この時期の製鉄炉下部構造としては非常に良好な状態で残っている。
- ・炉本体(上部構造)は操業毎に破壊するため、これまで構造が不明確であったが、今回の調査でその破片が多量に出土していることから、今後その復元が期待できる。

## <まとめ>

横断道の予定地には19箇所(遺跡)が所在し、このうち14箇所が古代から近代のたたら跡や鍛冶工房跡、かんな流し(砂鉄採取)跡であり、まさに鉄生産の本場を調査していることとなる。全国的にもこれだけの鉄生産関連遺跡を同時に調査することは過去になく、各時代の鉄生産の具体像が明らかになることが期待できる。